

強度行動障害者に対する好みの活動選択を取り入れた支援

障がい者地域生活・行動支援センターか〜む

～ 特集 「第12回研究・実践成果発表会」 第2部 研究・実践成果発表から ～

1. はじめに

強度行動障がい児・者の生活を支えるためには、障がい特性に合わせた物理的に構造化された居住空間や確固としたスケジュールなどに加え、1人で過ごせる活動が有効であると言われています。

しかしながら、興味・関心が限定的になりやすいなどの障がい特性から、特に余暇時間に課題を抱えるケースが多く見られます。

そこで、当事者の強みを活かしたツールを用いながら、活動を選択する機会を設けることで余暇時間を安定して過ごせるようになり、余暇活動のレパートリーの充実にも繋がった事例について報告します。

2. 支援の経過について

○事例の概要

Aさんは物や人の位置が気になると、納得するまで修正せずにはいられない等のこだわりの強さが見られました。そうしたこだわり行動を支援員が制止すると、支援員を叩いてしまうこともありました。

これらの行動は活動に従事できていない時間、特に余暇時間に起こりやすく、廊下の往復（以下、前兆行動）から始まる傾向があることが分かりました。

一方で、コミュニケーションの理解面は高く、写真やイラストが何を示しているか理解することができました。また『する』か『しない』かは、カードの指さしや裏返しなどで伝えることができました。



○支援方法とその結果

Aさんの行動を記録し、分析した結果、前兆行動は提供された余暇活動とAさんが望む活動とのミスマッチから起きているのではないかと仮説に基づき、支援方法を考えました。

【ベースライン期：具体物提示】

余暇時間になると廊下に具体物が並べられ、Aさんに活動を選んでもらいました。Aさんはグッズを手には取るものの、頻繁に入れ替えてしまい、1つの活動に集中して取り組むことができませんでした。

この提示方法では、Aさんにとっては刺激が強すぎてしまうと考え、写真提示に変更することにしました。



【第1期：写真カード提示】

余暇時間になると余暇活動を写真で示した選択ボードが提示され、Aさんはカードを選んで支援員に手渡すことで、選択した活動に取り組むことが出来ました。

最も多く選んだ活動はドライブでしたが、ドライブ中にハンドルを操作しようとする等の行動が見られたことから、行先がAさんのニーズと合っていないのではないかと考えました。

